

読む力を鍛える 精読について

名古屋語学教育研究室
服部 茂

学生の皆さんは、日頃どんな方法で英文を読む練習をしているのだろうか。独り善がりになっていないだろうか。分かったつもりで読んでいないだろうか。

英文を読む力、英文読解力を養うには、英文を丹念に読み進める精読がその有効な手段のひとつである。精読力を身につけることにより、誤読や誤解をかなりの部分で防ぎ、正しく英文が読める下地をつくる。その下地を基盤に、英文を要約、多読、速読することも可能になり、今後の発展的な学習が期待できる。さらに、精読力が備わっていれば、どんな形態の英文であろうとある程度自信を持って臨めることであろう。

ここで、誤解して欲しくないのは、精読イコール訳読と捉えることである。確かに、精読と訳読は同義語的であり、やり方次第では同じ意味を指すこともあろう。しかし、精読とは文章を納得して読みすすめ、決してごまかさずに英文と向き合い理解することである。英文を構成する文法、語彙、構文、リズム、発音などを含め忠実に英文を読み解き、その規則なりを自分のものにしていくプロセスなのである。一方、訳読は、精読と逆行するプロセスであり、ただ訳して終わり。英語から日本語に置き換えたにすぎない作業なのである。その結果、その英文の意味がどんな内容なのか、訳者には関心がなく、よって日本語においても説明ができない。

実際、私も読み中心の授業の場合、英文の意味

を問うたり、試験問題の設問をつくる際、本当に学生がこの英文を読めているかどうかを判断するために、日本語の要約や説明を果たすことが多い。日本語に写し換えただけでは不十分として見なししている。というのも、それだけで英文が読めているかどうか判断するのが難しいからである。繰返えすが、精読と訳読は、英語学習において全く違う学習過程であり、前者は、確実に読む力を養い、後者は不安定な読みであることを強調したい。

精読力（読む基礎力）がいかに大切であるかをもう少し述べてみる。私の経験の一例ではあるが2つのエピソードを紹介しよう。1つ目は、「速読」はどうすれば上達するのかといった趣旨の相談を学生から受けたことがある。その時、その学生に所有格の関係代名詞を入れた簡単な短文を書き、それを訳してもらったところ、その学生はしばらく考え込んで、誤訳さえしてしまった。つまり、彼には、英文を十分に読みこなすだけの文法が備わっておらず、速読の域にも達していなかったのである。文法力がなければ、短文ですら理解できない例である。2つ目は、「意味はだいたい分かります」、「大雑把には内容を把握しています」と言う学生がいる。それは果たして本当だろうか。その「だいたい」や「大雑把」に正しく内容を把握できる力はかなりの高度な英語力を必要とし、上級の学習者でなければならない。日本語においても、私たちはある程度の日本語力がついているからこそ新聞の見出しを見ただけで、正しくその内容を予想できたり、その流れを読めたり、読めない漢字ですら基本となる漢字を熟知しているので、なんとかその意味が正しく推測できるのである。速読も内容把握もしっかりとした基礎力の裏づけがあって初めてできることなのである。

その精読学習の中心となるのが語彙も含め文法であり、構文である。動詞の語法、時制、受動態、不定詞、分詞、動名詞、関係詞、接続詞、句と節の概念、品詞といった文法は文中でどんなはたらきをするかを理解しておかなければならない基本文法である。文法にあまり自信がない人は、受験英語といった細かい例外の用法は必要ないので、

最低限これらの文法事項がどんな場合に使われるのかを高校時代に使用した参考書で良いので、各文法事項の冒頭の説明を読んで理解しておくことは大切である。学習法については、文法書で文法項目を集中して復習するのも方法だが、これらの文法事項を読みものを通じて、文法と読みを平行して復習するのも方法であろう。

英語学習上級者には、抽象度が高く、ある一定の知識、経験をもち合わせた成人向けに書かれた英文に挑戦してほしい。比較、仮定法、倒置、省略、強調、同格、無生物主語、名詞構文、句と節の挿入は押さえておきたい。書き手は、読み手により説得力をもたせるためにも、英文構造をより複雑に組み立ててくるし、使われる語彙も当然豊富になる。英米のエッセイなどは読み応えがある文章がたくさんあるので是非触れてみて、一文一文身にしみながら英文を味わうおもしろさを知ってもらいたい。

精読を通じて学習する利点は、読解力が高まるにつれ、例えば英文構造にしても、so~that だからとか、比較だからこう訳す（訳読の名残）ではなく、書き手は、自らの感情や思考を英文構造や構文に託しているのでこうした書き手の気持ちや微妙なニュアンスが文法、構文を通じて直に分かるようになる。ここまできると、訳書ではなく原文に当たってみたくなる。原書の原文を読むことで、訳書よりも直接その意味がストレートにわかってきて、英語そのもので理解するようになる。原書にあたらないうまくいかないという感じになれば、精読力云々（うんぬん）は卒業であり、その時、前から自然に英文を読んでいることであろう。

文法、構文、語彙に立脚して英文を丹念に読む学習、精読は、読むための学習だけでなく、読むことを通じて、英作文、会話、リスニング、さらに、各種英語の検定試験へと学習の応用が効き、学生諸君の英語学習の助けとなる。辞書一冊（これも正しく使いこなせることが前提）あれば、どんなジャンルの英文も読めるという自信がつけば、英語はもっと楽しくなる。

ミスター・メンとリトル・ミス——英語キャラクター絵本の人気シリーズ

経営学部

安藤 聡

ロジャー・ハーグリーヴズ (Roger Hargreaves, 1935~1988) の絵本「ミスター・メン」(Mr Men) シリーズは1971年にその第一作『ミスター・ティックル』*Mr Tickle* が出版されて以来、『ミスター・チアフル』*Mr Cheerful* まで全43作を数え、絵本ばかりでなく様々なキャラクター商品も英語圏のみならず世界中で人気を博している。絵は単純な線と鮮やかな色彩で描かれ、各巻のタイトル (= 主人公の名前) がそのままその主人公の性格、特質を表す。例えばミスター・ノイズィー (Mr Noisy) はとても五月蠅く、ミスター・レイズィー (Mr Lazy) は怠け者で、ミスター・フォゲットフル (Mr Forgetful) は忘れっぽく、ミスター・ロング (Mr Wrong) は間違えてばかりいる。

ハーグリーヴズはヨークシャー西部のクレックヒートンで洗濯屋を営む両親の許に生まれ、高校を卒業して一年間家業を手伝ったのち、近隣のブラッドフォードの広告会社にコピーライターとして就職し、数年後にロンドンの広告会社に移った。絵本の文章にも短いセンテンスと単純な言葉が効果的に使われているが、このような技法はおそらくコピーライターとして活躍していた時代に培われたのであろう。ロンドン時代のある日、会社での会議中に、ハーグリーヴズは手が異様に長い男の絵を書類の余白に落書きしていた。その絵がことのほか上手く描けたので、自宅に持ち帰り長男のアダムに見せたところ、アダムは「この人にくすぐられたらどうなるだろう?」と言ったらしい。